

一般道路改良工事（市道羽根1号線）

—埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書—

羽根原遺跡

2010.3

伊那市建設部建設課

伊那市教育委員会

伊那市埋蔵文化財調査報告書 第1集

一般道路改良工事（市道羽根1号線）

—埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書—

羽 根 原 遺 跡

2010. 3

伊那市建設部建設課

伊那市教育委員会

あ い さ つ

平成18年3月31日に誕生した新しい伊那市は、伊那市・高遠町・長谷村が合併し、その面積は長野県下の市町村において3番目となる667km²余と広大なものとなりました。合併により、新市の財産ともいえる文化財を数多く共有することとなり、市内の「周知の埋蔵文化財包蔵地」も425か所となっています。

今回、発掘調査を実施した羽根原遺跡は、伊那市富県北福地の中で南部にあたる「羽根」と呼ばれる地区に存在します。お参りすると味噌の味が良くなる「味噌薬師」として信仰を集めた薬師如来を安置する恵山薬師堂周辺が包蔵地となっています。

この遺跡内において市道羽根1号線の道路拡幅が計画され、工事に先立って緊急発掘調査を実施しました。本書はその結果を報告書にまとめたものです。本調査は、耕作の状況を考慮し、平成20年12月の第Ⅰ次と平成21年7月の第Ⅱ次にわけて実施されました。限られた道路拡幅内での調査で、全体を把握できるような成果は得られませんでした。発掘歴のない遺跡において、情報を得られる貴重な機会となりました。

発掘調査実施および報告書刊行にあたりまして、長野県教育委員会文化財・生涯学習課、伊那市建設部建設課、上伊那農業協同組合富県支所、地権者や地元の皆様をはじめとした関係諸機関及び関係者の皆様、加えて、現場での調査から報告書作成まで一貫してご指導いただきました発掘調査団長の飯塚政美様、整理作業にご尽力いただきました太田保様、12月の寒風吹きすさぶ中、また、翌年は梅雨の合間をぬう困難な環境で作業に従事していただいた作業員・重機オペレーターの皆様、その他多くの方々のご理解とご協力により調査が実施できましたことに対し、ここに厚く感謝の意を表します。

平成22年3月19日

伊那市教育委員会

教育長 北原 明

凡 例

- 1 本書は、平成20年度～21年度に実施した市道羽根1号線の一般道路改良工事に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書である。
 - 2 この緊急発掘調査は伊那市長の委託により、伊那市教育委員会が市内遺跡発掘調査団（富県地区）を編成し、この調査団に事業を委託して実施した。
 - 3 本調査は、平成21年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにする。
 - 4 本文の執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記載した。
飯塚政美 太田保 高松慎一
- ◎図版作成者
- ・遺構及び地形実測図 飯塚政美 高松慎一 福澤浩之
 - ・土器及び石器実測図 太田保
 - ・土器拓影 太田保
- ◎写真撮影者
- ・発掘及び遺構 飯塚政美
 - ・遺物 飯塚政美
- 5 本報告書の編集は主として市内遺跡発掘調査団がおこなった。
 - 6 出土遺物、遺構図面類及び実測図面類は伊那市民会館に保管してある。
 - 7 遺物分布図及び断面図は、編集の都合上、出土した遺物を抽出して掲載した。したがって出土した遺物の全てが表示されていないことを承知願いたい。

羽根原遺跡 (第 I 次緊急発掘調査)

目 次

あいさつ

凡 例

目 次

挿図目次

図版目次

第I章 環 境	8
第1節 位 置	8
第2節 地形・地質	8
第3節 歴史的環境	9
第II章 発掘調査の経過	11
第1節 発掘調査に至るまでの経緯	11
第2節 発掘調査の組織	11
第3節 発掘調査日誌	12
第III章 発掘調査	14
第1節 調査の概要	14
第2節 遺 構	14
第IV章 所 見	20

挿 図 目 次

第1図 春富地区遺跡分布図	10
第2図 地形及びトレンチ・遺構配置図	15
第3図 第1号～2号溝状遺構・第1号墓坑実測図	17
第4図 第1号～2号溝状遺構・第1号墓坑遺物分布図	18
第5図 第1号溝状遺構断面図	18
第6図 第2号溝状遺構断面図	18
第7図 第3号溝状遺構実測図	19
第8図 第3号溝状遺構遺物分布図	19

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景
図版2 遺 構
図版3 遺 構
図版4 遺物出土状況及び発掘状況

第I章 環 境

第1節 位 置

羽根原遺跡は長野県伊那市富県北福地羽根部落にある。羽根原遺跡に至るまでの経路の最短距離は、JR飯田線伊那市駅を下車して、東へ500m程行くと、天竜川にかかる中央橋にぶつかる。さらに、この橋を渡って1km程南東へ行くと、三峰川左岸第一河岸段丘面に架かる「竜東橋」に達する。この辺一帯は大部分が水田に土地利用され、伊那市の一大穀倉地帯を成している。第一河岸段丘面を横切って、さらに東へと歩を進めていくと、段丘崖面にぶつかり、この辺から上は三峰川第二河岸段丘面である。この面に至ってまず最初に目をうばわれるのは右側に近代的な白い大きな建物が目に写る。これが、パルプ生産で世界的に有名な「キッツ」という工場である。この建物を後にして、さらに東へ向かって1.5km程行くと、三津木地籍に出る。この集落をさらに東側へ行くと「十字路」につきあたる。このところに「畑谷商店」という雑貨商を営む家にゆきつく。この十字路を左折してしばらく北進すると坂道があり、左側に「味噌業師」と呼ばれる小さい堂が立ち、この周囲に墓地がある。この堂を中心にして付近一帯に「羽根原遺跡」が展開している。本遺跡地の西側は若干の段丘状地形を成し、付近の人に聞いたところつい最近までジクジクして水が湧出していたと話してくれた。おそらく、羽根原遺跡に住みついた人達は常にこの水を利用して生活を営んでいたであろう。

第2節 地形・地質

本遺跡は竜東地区（天竜川の東側）と総称して呼ぶ地域であり、三峰川との強いかかわりがあるので、三峰川の状況を述べてみる。三峰川の水源は南アルプスであり、最初はフォッサマグナに沿って北北西に流れ、黒川を合わせ、伊那市長谷美和非持付近で山室川と合流し、この地点で、西北にその流れを変える。伊那市高遠町内で藤沢川を合わせ、次に、西側に転じて、流下し、伊那市下新田付近で天竜川に注ぎ込んでいる。本河川は、高遠を扇頂としてかなりの傾斜度を持ち、約9kmの長さにおよぶ扇状地を形成している。

扇状地を形成している砂礫の種類は砂岩、泥岩、片麻岩、花崗岩、石灰岩等々であり、これらの石は赤石山脈、伊那山脈を構成しているもので、地表面に露出しているものは、両山脈から運搬されたものと考えられる。

本遺跡は、小高い丘陵地になっており、丘陵の縁周辺は湿地帯が幅広く広がりを持ち、湧き水がとところどころにみられる。遺跡の南側を大沢川が東から西へ流下している。この光景は、遺跡が存在するのに必要十分な状況下であった。

第3節 歴史的環境

今回、発掘調査を実施した「羽根原遺跡」は北福地の南部地域に含まれている。この地域は、およそ今から千年程前に京都の中央で編纂された『倭名類聚鈔』の中に伊那郡「福智」、あるいは「布久地」と記された郷の存在が分かる。現在でも南・北福地の名が残っており、仮名の意義合いが濃厚である。

福地郷は、およそ、北は三峰川、西は天竜川が境となり、河南、東伊那、中沢まで含まれていた北域である。貝沼の角地前から緑釉環が発見されている。ある時期には、今回、発掘調査を実施した「羽根原遺跡」一帯が、富県地域の中心地であることからして、かつての「福智郷」の中心が、この付近一帯に存在していたとの推定論が成り立つのであろう。

駒ヶ根市東伊那栗林から出土した埴人系系統の甕が存在し、このことは、この郷の中心的集落の一つが位置していたことを物語ってくれる。

いずれにしても、「福智郷」を支配した「郷長」の位置づけを考えてみなければならない。この大きな問題点を考えて見るには、この郷に接している「他の郷」との接点及び意義付けを想定してみなければならない。伊那市内には福智郷の他に「弓良郷」「小室郷」と呼ばれている平安時代の「大きな集落址」が実存していたことは事実であり、これらをからめた上での、今後の研究が必要であらう。

今までに、春富地区（春は東春近の一字を、富は富県地区の一字をそれぞれ取り上げて、命名している。）で発掘調査を実施した遺跡名と所在地を記すと下記のようになるが、よく理解できるように、第1図春富地区遺跡分布図を大いに活用する。

③奈良尾遺跡（富県北新）、④芝生遺跡（富県北新）、⑤舟ヶ洞遺跡（富県北新）、⑦宮原遺跡（富県北新）、⑩まこもが池遺跡（富県貝沼）、⑮御殿場遺跡（富県貝沼）、⑳根本谷中畑遺跡（富県北福地）、㉑小御堂遺跡（富県南福地）、㉒阿原古墳（富県南福地）、㉓羽根原遺跡（富県北福地）、㉔三ツ木遺跡（富県北福地）、㉕上原遺跡（東春近車屋）、㉖殿島城跡（東春近中殿島）

現在50か所に近い遺跡の存在が知られているが、なかでも御殿場遺跡と三ツ木遺跡は全国的に著名であり、現地を訪れる多くの人々がいる。

御殿場遺跡は現在、長野県史跡に指定されており、かつての発掘調査の折に、多量の土器、石器の出土があった。なかでも、顔面付釣手形土器は国重要文化財に指定され、それによって御殿場遺跡を有名にさせた一因となっている。

三ツ木遺跡は縄文早期押型文土器を出土した遺跡として有名である。

（飯塚政美）



第1図 春富地区遺跡分布図

遺跡の名称

●富 県

- | | | | |
|---------|-------------|---------|---------|
| ① 北林 | ② 今泉 | ③ 奈良尾 | ④ 芝王 |
| ⑤ 舟ヶ洞 | ⑥ 中平 | ⑦ 宮原 | ⑧ 合の原 |
| ⑨ 小松 | ⑩ 和手 | ⑪ 大塚古墳 | ⑫ 上垣外 |
| ⑬ 宮の花 | ⑭ まこもが池 | ⑮ 御殿場 | ⑯ 葛蒲平古墳 |
| ⑰ テマテ古墳 | ⑱ テマテドウセギ古墳 | ⑲ 根本谷古墳 | ⑳ 根本谷中畑 |
| ㉑ 手間手 | ㉒ 不幸路 | ㉓ 八人塚 | ㉔ 小御堂 |
| ㉕ 阿原古墳 | ㉖ 高岱 | ㉗ 蚕玉古墳 | ㉘ 羽根原 |
| ㉙ 羽根田古墳 | ㉚ 駒合古墳 | ㉛ 三ツ木 | ㉜ 駒ヶ原 |

●東 春 近

- | | | | |
|----------|-----------|----------|---------|
| ㉝ 瀬戸古墳群 | ㉞ 男塚古墳 | ㉟ 宮の上古墳群 | ㊱ 社宮司古墳 |
| ㊲ 田原寺古墳群 | ㊳ 古寺古墳群 | ㊴ 洞古墳群 | ㊵ 大沢古墳群 |
| ㊶ 本城古墳群 | ㊷ 宮場間様古墳群 | ㊸ 老松場古墳群 | ㊹ 下原 |
| ㊺ 中原 | ㊻ 上原 | ㊼ 殿島城跡 | |

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまでの経緯

今回、発掘調査の対象となった羽根原遺跡は、市道羽根1号線における一般道路改良工事に伴う緊急発掘調査であり、調査実施に至るまでには各種の保護協議、事務手続が行われ、それらを流れに沿って記しておくことにする。

平成20年11月4日付けで、長野県教育委員会宛に埋蔵文化財発掘の通知について（第94条第1項の規定による）を提出する。

平成20年11月20日付けで、伊那市長小坂愷男と市内遺跡発掘調査団（富県地区）団長飯塚政美両者間で、埋蔵文化財発掘調査委託契約書を取り交わす。

平成20年12月19日付けで、羽根原遺跡発掘調査終了報告書を長野県教育委員会教育長宛に提出する。

平成20年12月19日付けで、羽根原遺跡埋蔵物発見届を伊那警察署長宛に提出する。

平成20年12月19日付けで、羽根原遺跡埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会へ提出する。

第2節 発掘調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

伊那市教育委員会

委員長 松田 泰 俊

委員長代理 荒木 康 雄

委員 伊藤 のり子

“ 熊谷 健

教育長 北原 明

教育次長 竹松 武 登

事務局 北原 秀 樹（生涯学習課長）

“ 小松 博 康（生涯学習課長補佐 生涯学習係長）

“ 吉澤 正 徳（青少年係長）

“ 唐木 芳 樹（文化財係長）

“ 柴 千恵美（生涯学習係）

“ 矢澤 浩 幸（ “ ）

“ 竹中 康 仁（青少年係）

事務局 高松 慎一 (文化財係)
発掘調査団
団長 飯塚 政美 (日本考古学協会会員)
調査員 太田 保 ()
事務局 北原 秀樹
唐木 芳樹
高松 慎一
作業員 松下 末春 向山 治男 (敬称略順不同)

第3節 発掘調査日誌

平成20年12月8日 現場事務所及び簡易水洗トイレの設置を行う。飯塚団長の指示を仰ぎ、西箕輪羽広の伊那市考古資料館敷地内のプレハブ小屋より発掘資・機材の搬入を行う。現地にて明日からの作業の打合わせを行う。

平成20年12月9日 本日から本格的に発掘調査を開始する。現道の東側拡幅部分にトレンチを設定(幅1.5m)し、北側から重機にて表土剥ぎを開始する。途中、溝状の落ち込みがあり、掘削範囲を広げ平面プランの確認を行う。出土遺物から弥生時代の遺構と推測される。午後、現道西側の拡幅部分にトレンチを設定し、北側から表土剥ぎを開始する。地元の人の話では、傾斜地であったところを水田化するために切り土してあるとのこと。

平成20年12月10日 現道東側のトレンチを第1号トレンチ、現道西側のトレンチを第2号トレンチとする。第2号トレンチの東西方向の表土剥ぎを行うが、東側はハードテフラが検出され、遺構・遺物とも検出されなかった。第1号トレンチ・第2号トレンチの位置を遺構配置図に記入し、それぞれ断面図を作成。第1号トレンチの遺構未検出部分および第2号トレンチの埋戻しを行う。溝状遺構の遺構掘削を進める。溝状遺構の中に墓坑があり、大型草食動物のものと思われる歯が出土する。馬歯と推測されるが、時代は不明である。これを第1号溝状遺構とする。

平成20年12月11日 第1号溝状遺構の遺構掘削を進め、セクション図を作成する。第1号溝状遺構の南側の溝状遺構を第2号溝状遺構とし、遺構掘削を進める。第1号よりも深く、堅く締まっており遺構掘削に苦労した。馬歯の出土した第1号溝状遺構中の墓坑を第1号墓坑とし、遺構掘削を進める。馬歯が北側から出土し、非常にもろくなった骨片が、墓坑の西側から南側にかけて出土した。骨片の多くは、黒色土の締まりのない層から出土した。並行して第2号溝状遺構南側の遺構検出を行う。

平成20年12月12日 昨日に引き続き第2号溝状遺構南側の遺構検出を行う。第1号溝状遺構、第1号墓坑、第2号溝状遺構の遺物分布図を作成し、遺物を取り上げる。第2号溝状遺構を掘

り下げていき、遺物を確認したところ、弥生時代後期後半の中鳥式の土器片が出土した。

平成20年12月15日 第2号溝状遺構の南側については、道路に並行して南北に溝状遺構があり、第3号溝状遺構とする。しかし、ほとんどが現道の下であり、全容は不明である。遺物は溝の周辺部に存在していた。写真撮影のため、第1号および第2号溝状遺構の清掃を行い、午後写真撮影を行う。第3号溝状遺構の遺物分布図を作成する。第2号溝状遺構のセクション図を作成する。

平成20年12月16日 第1号から第3号溝状遺構および第1号基坑の遺構平面図を作成する。また、遺構の位置を遺構配置図に記入する。馬歯の取り上げを行う。頭部付近はテフラブロックを含むやや締まった暗褐色土であるが、腹部と思われる部分は軟らかい黒色土であった。並行して、土器洗浄を行う。精査の結果、出土遺物のほとんどが弥生時代後期の土器片であった。

平成20年12月17日 小雨の中、埋め戻し作業を行う。不要となった発掘資・機材を洗浄し、伊那市考古資料館へ運搬する。

平成20年12月18日 現場小屋の撤収を行う。残った発掘資・機材の撤出を行う。本日で現場での作業を終了とする。

平成20年12月～平成21年3月、遺物の整理、遺物の実測、図版の作成、写真撮影を行う。

(高松慎一)



発掘状況

第三章 発掘調査

第1節 調査の概要

羽根原遺跡周辺の現状での土地利用は大部分が水田で、その他は散在的に集落がまとまっている。水田地帯が広く展開している区域は耕作土、黒褐色土層、暗褐色土層、赤褐色土層、黄褐色土層、テフラ層の順に層序が成り立ち、地質学的に見ても、安定した場所であった。

調査した地域は道路拡幅部分だけで面積的には狭く、したがって、調査地域も限定されていた。これと同時に、遺物の出土も極めて少量で、土師器、須臾器、弥生土器、馬の骨粉、石器等々であり、なかでも馬歯、馬骨粉の出土例は近年の発掘調査によって増加している。加えてもう少し、広範な面積を調査したならば、遺構の時期決定に役立つのであろう。

第2節 遺 構

今回の発掘で検出された遺物については第Ⅱ次の最後に掲載してあるので、そちらを参考にしてください。

第1号溝状遺構（第3～5図 図版2）

発掘調査地区の最北端に今回の遺構は発見され、表土面から60cm程下ったソフトテフラ層を切っている。東側は用地外、西側は現道のため、東西の規模は不明。平面プランは若干、カーブがついている。北の壁に接して、第1号溝状遺構を掘り込んで、円形状に近く、第1号墓坑を構築してある。

壁高は東、西用地外のために不明。南壁と北壁は20cm～25cm位で、凹凸が若干あり、やや外傾気味で軟弱である。床面は小さな凹凸があり、ややU字状を呈している。溝状遺構としてはやや浅い。

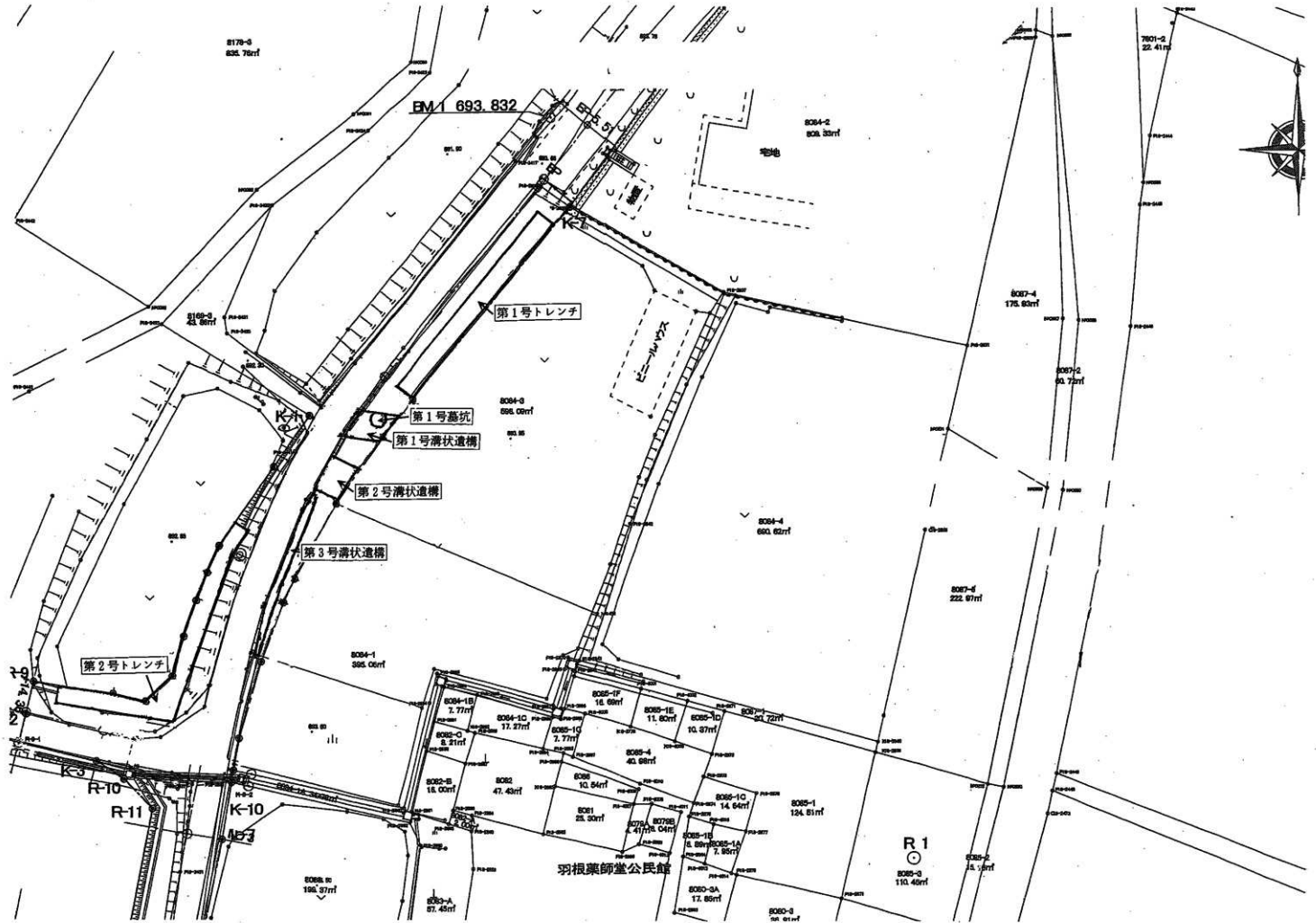
遺物は第1号墓坑の方に集中して出土しており、その数は7個と少なく、本遺構の時期は、弥生時代後期初頭であった。

第2号溝状遺構（第3～4・6図 図版2）

遺物は32個と、割合に数少なく、ほとんどが弥生時代後期前半であった。

本遺構は北側は第1号溝状遺構、南側は第3号溝状遺構のほぼ中間地点に存在し、片側は現在道路に、もう一方は用地外で占められており、発掘調査は不可能となり、したがって、発掘調査可能用地はごく限定された姿となっており、表土面より40cm位下ったソフトテフラ層を掘り込んで構築してある。平面プランの形態は溝状、断面はU字状で、溝らしく掘ってあった。壁の上部、中部はソフトテフラ層で、中・下部はハードテフラ層より組成されている。

壁高は、南で160cmを測り、若干の凹凸があり、やや外傾気味で堅い。北壁の高さはやや外



第2図 地形及びトレンチ・遺構配置図(1:250)

傾気味で、堅く、平坦面を成している。

床面は大般、平坦で堅くなっている。弥生時代後期の土器片が出土し、したがって、同時代の所産と思われる。

第3号溝状遺構（第7～8図 図版3）

本遺構は今回、発掘調査を実施した内で最南端部に検出されたもので、南北に細長く走っており、表土面より30cm位下ったソフトテフラ層を掘り込み、南北に走る現道に沿って構築してある。東西は西側が現道下のため不明。南北は南側が調査不能のため不明。

ただ、東から西にかけて急傾斜で、やや堅くなっている。溝状遺構としては急傾斜であるが、幅は現状から察して極めて狭いものと思われる。現状の数値は形状の幅20cm～60cm、深さ30cm～50cmを測る。遺物は11片出土し、その内訳は土師器、弥生土器、動物の骨であったが決め手となるものはなく、したがって時期不詳である。

第1号墓坑（第3図 図版4）

今回、本遺構は発掘調査を実施した内で最北端に位置し、表土面から60cm位下ったソフトテフラ層を掘り込んで、第1号溝状遺構をつくり、小さな凹凸があり、軟弱を呈す。その底面（ハードテフラ層組成）をさらに20～30cm程掘り込み、南北1m20cm位、東西1m30cm位の規模を持ちながら、若干のカーブを描きつつ、円形プラン遺構の東側は用地外、西側は現道のため、それぞれの調査は出来ずに終わった。

壁は前述の通り、東、西は用地外で不明、南壁は25cm、北壁は20cmを測り、凹凸が若干あり、やや外傾気味で軟弱である。

墓坑内より馬の骨、馬の歯が出土した。後者の馬歯は、第4図に表示したように大きくブロック的に出土した。他は骨粉程度であった。

北壁は良好で高く、東、西、南壁は若干凹凸があり、軟弱であった。馬の骨、土師器が出土したが、時期は不詳である。

前述のとおり、出土した遺物は第Ⅱ次にまとめて一括述べることにするので、今回は省略する。

（飯塚政美）

前述してきた3基の溝状遺構に混じて1基の墓坑が検出された。

これらの遺構内より出土した主な遺物の内容を記すことにする。

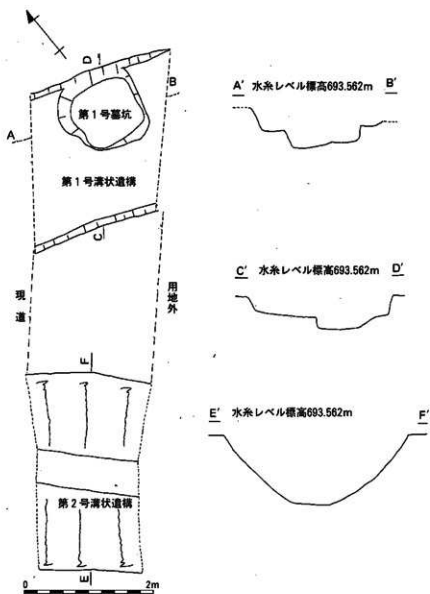
第1号溝状遺構より出土したのは2片の弥生時代後期土器片であり、第4図内に標示された3と7がそれである。

第2号溝状遺構の遺物出土状態を概観してみよう。遺構のほぼ中央部付近に弥生時代後期土器片が出土し、それは第4図に標示した4である。

第5図は第1号溝状遺構の断面図であり、本遺構の埋没時における土層状態を上層より下層に向かって実測を

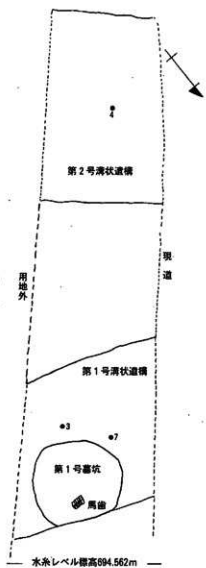
行った。上層より堆積土層状態を概観すると、次のようになる。Iは黒色土層（耕土）（しまりがなく、サラサラしている。）、IIは黒褐色土層I（Iより黒味が弱く、堅くしまっている。）、IIIは暗褐色土層（堅くしまる。）、IVは黒褐色土層II（Vより黒味が強く、しまりは弱い。）、Vは黒褐色土層III（IVとほぼ同じ色、IIIより堅くしまる。）、VIは褐色土層（やや暗い、テフラブロック粒を含む。）、VIIは明褐色土層（しまりがなく、ねばりがある。）、VIIIはテフラ層、以上の順序で色調の違いが明確に把握できた。

第3図は第2号溝状遺構断面図を明示してあるが、断面はきちんとU字状の溝状を呈し、土層堆積は厚く、また、色調も判然としていた。このような状態なので、土層の堆積層序と特徴について第6図の説明書きをよく観察して下さい。



第3図 第1号～2号溝状遺構・第1号墓坑実測図

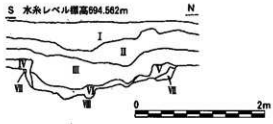
(飯塚政美)



凡例
● 弥生土器

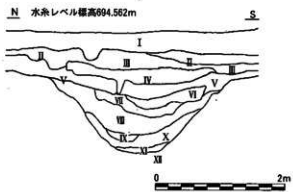


第4図 第1号～2号溝状遺構・
第1号墓坑遺物分布図



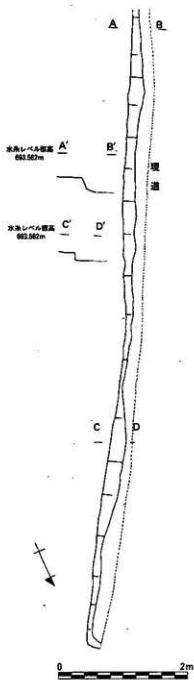
- I 黒色土層（粘土）（しまりがなく、サラサラしている）
- II 黒褐色土層 I（Iより風味が弱く、堅くしまっている）
- III 暗褐色土層（堅くしまる）
- IV 黒褐色土層 II（Vより風味が強く、しまりは弱い）
- V 黒褐色土層 III（IVとほぼ同じ色、Ⅲよりも堅くしまる）
- VI 褐色土層（やや暗い、テフラブロックを含む）
- VII 明褐色土層（しまりが無い、ねばりがある）
- VIII テフラ層

第5図 第1号溝状遺構断面図

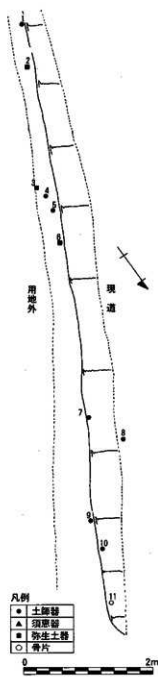


- I 黒褐色土層（粘土）（やや堅くしまる）
- II 暗褐色土層（堅くしまる）
- III 黒褐色土層 I（Iより黒色が強い、ややしまる）
- IV 黒褐色土層 II（Ⅲより黒色が強い、堅くしまる）
- V 暗褐色土層 I（テフラ粒を多く含む、堅くしまる）
- VI 黒褐色土層（IVとほぼ同じ黒さ、堅くしまる）
- VII 暗褐色土層 II（Vよりやや黒く、堅くしまる）
- VIII 暗褐色土層 III（Ⅶより黒色が強い、砂が混じり堅くしまる）
- IX 赤褐色土層（やや赤味がかる。砂が混じり堅くしまる。テフラブロックを含む）
- X 黄褐色土層 I（IXより赤みが弱い、テフラ少量を含む。砂が混じり堅くしまる）
- XI 黄褐色土層 II（2cm角程度のテフラブロック、そのすき間の砂から成る。堅くしまる）
- XII テフラ層

第6図 第2号溝状遺構断面図



第7図 第3号溝状遺構実測図



第8図 第3号溝状遺構遺物分布図

第IV章 所 見

今回、市道拡幅との事由で発掘調査を実施した「羽根原遺跡」は行政上では伊那市富県北福地に属している。用地買収の進捗如何によって第I次調査、第II次調査に分けて行い、その発掘成果については一冊に合本して報告書にまとめあげた。

まず、第I次の内容については簡略的に述べておく。それらの遺構の時期、大きさ、具体的な内容及びその特徴については箇条書きに綴っておくことにする。

1. 弥生時代後期の溝状遺構で、これを第1号溝状遺構と呼び、用地内の発掘調査に限定されていたので規模は不明であり、したがって、不詳の面が数多く見られ、第三章第2節遺構に述べてある原稿の内容について分かるところだけに限定しておいた。
2. 第1号溝状遺構に接近して、溝状に黒い落ち込みが見られ、これを第2号溝状遺構と命名し、弥生時代後期に編年づけられ、規模については第3図第2号溝状遺構実測図を参照して下さい。この理由は道路用地内だけの発掘調査に限定されたためである。第1号溝状遺構、第2号溝状遺構が検出され、さらに加えて、もう一つの溝状遺構が検出され、通し番号にて第3号溝状遺構と命名して調査を進めると、傾斜が強く、幅も狭かった。溝状遺構の形態自体は第1号溝状遺構と第2号溝状遺構とは多少の規模や深さに違いはあるが、全般的にはほぼ同様であった。
3. 第1号溝状遺構と接して第1号墓坑が発見され、覆土内より動物の骨が出土し、よく精査してみるとこれは馬の歯及び馬の骨と思われた。かつてこの辺の地域は古代には「福智郷」あるいは「布久知郷」と呼ばれ、古代の牧場が大きな面積を占めていたのであろう。牧場の空間地帯に平安時代の集落址が広い展開を成していたのであろう。

今回は、動物の骨鑑定について、費用面等から断念せざるを得なかったが、いつの日にか、鑑定することも必要であり、その結果によって本遺跡地周辺の意義づけが解明可能となつてこよう。

今回の調査でお手伝いいただいた皆様と地元、富県地区の皆様へ厚くお礼申し上げる次第であります。

(飯塚政美)

圖 版



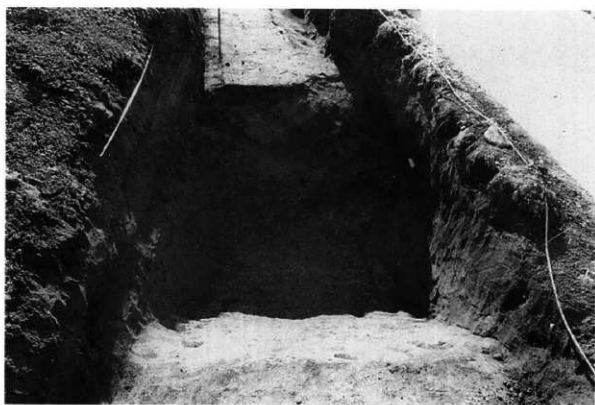
遺跡地を西から見た状況



遺跡地を北から見た状況



第 1 号溝状遺構



第 2 号溝状遺構



第 3 号 溝 状 遺 構



第 1 号 墓 坑



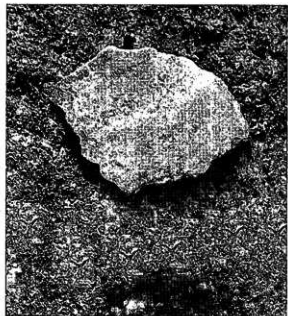
弥生土器出土状況（第2号溝状遺構）



馬歯出土状況（第1号墓坑）



発掘状況



弥生土器出土状況 (第2号溝状遺構)



馬歯出土状況 (第1号墓坑)



発掘状況

報 告 書 抄 録

ふりがな	はねはらいせき							
書名	羽根原遺跡（第1次発掘調査）							
副書名	一般道路改良工事（市道羽根1号線）							
巻次								
シリーズ名	伊那市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1集							
編著者名	飯塚政美 太田保							
編集機関	伊那市教育委員会							
所在地	〒396-8617 長野県伊那市下新田3050番地 TEL. 0265-78-4111							
発行年月日	西暦 2010年3月19日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 〇° 〇′ 〇″	東経 〇° 〇′ 〇″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
羽根原	長野県 伊那市 富県 北福地	20209	261	35° 48′ 21″	137° 59′ 25″	平成20年 12月8日 ～ 平成20年 12月18日	125	市道改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
羽根原	集落跡	縄文時代 弥生時代 平安時代	弥生時代溝状遺構 3 時代不詳墓坑 1		<ul style="list-style-type: none"> ・弥生時代土器 ・弥生時代打製石斧 ・平安時代の土師器 ・平安時代の須恵器 ・馬歯・馬骨 	弥生時代の高地性集落の一端と思われる遺構が確認された。		

羽根原遺跡 (第Ⅱ次緊急発掘調査)

目 次

目 次

挿図目次

図版目次

表 目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経過	4
第1節 発掘調査に至るまでの経緯	4
第2節 発掘調査の組織	4
第3節 発掘調査日誌	5
第Ⅱ章 発掘調査	7
第1節 調査の概要	8
第2節 遺 構	8
第3節 遺 物	12
第Ⅲ章 所 見	16

挿 図 目 次

第1図 地形及びトレンチ・遺構配置図	7
第2図 第1号竪穴住居址実測図・断面図	8
第3図 第1号竪穴住居址遺物分布図	9
第4図 第4・5号溝状遺構実測図・断面図	10
第5図 第4・5号溝状遺構遺物分布図	10
第6図 第6号溝状遺構実測図・断面図	11
第7図 第6号溝状遺構遺物分布図	11
第8図 第1号石囲遺構実測図	12
第9図 石器実測図	13
第10図 土器拓影・土器実測図	13

図 版 目 次

図版1 遺 構
図版2 遺 構
図版3 遺物出土状況
図版4 出土遺物

表 目 次

第1表 石器観察表	15
第2表 主要遺物観察表	15

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 発掘調査に至るまでの経緯

今回、発掘調査の対象となった羽根原遺跡は、市道羽根 1 号線における一般道路改良工事に伴う緊急発掘調査であり、平成 20 年度に実施した第 1 次発掘調査に引き続き、本年度工事分について第 2 次発掘調査として実施したものである。調査実施に至るまでには各種の保護協議、事務手続が行われ、それらを流れに沿って記しておくことにする。

平成 20 年 11 月 4 日付けで、長野県教育委員会宛に埋蔵文化財発掘の通知について（第 94 条第 1 項の規定による）を提出する。

平成 21 年 6 月 22 日付けで、伊那市長小坂整男と市内遺跡発掘調査団（富県地区）団長飯塚政美両者間で、埋蔵文化財発掘調査委託契約書を取り交わす。

平成 21 年 7 月 22 日付けで、羽根原遺跡発掘調査終了報告書を長野県教育委員会教育長宛に提出する。

平成 21 年 7 月 22 日付けで、羽根原遺跡埋蔵物発見届を伊那警察署長宛に提出する。

平成 21 年 7 月 22 日付けで、羽根原遺跡埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会へ提出する。

第 2 節 発掘調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

伊那市教育委員会

委員長	松田 泰 俊
委員長代理	伊 藤 のり子
委員	熊 谷 健
”	塚 越 英 弘
教育長	北 原 明
教育次長	竹 松 武 登
事務局	北 原 秀 樹（生涯学習課長）
”	飯 島 智（生涯学習課長補佐・生涯学習係長）
”	六 波 羅 太（青少年係長）
”	唐 木 芳 樹（文化財係長）
”	北 野 浩 幸（旧上伊那図書館開館準備係長）平成 21 年 9 月から
”	山 口 加 代（生涯学習係）

事務局 矢澤浩幸(生涯学習係)
" 竹中康仁(青少年係)
" 高松慎一(文化財係)
" 福澤浩之(")

発掘調査団

団長 飯塚政美(日本考古学協会会員)
調査員 太田保(")
事務局 北原秀樹
" 唐木芳樹
" 高松慎一
" 福澤浩之
作業員 松下末春 向山治男(敬称略順不同)

第3節 発掘調査日誌

平成21年7月1日 飯塚団長の指示を仰ぎ、西箕輪羽広の伊那市考古資料館敷地内のプレハブ小屋から発掘資・機材を運搬する。

平成21年7月2日 本日から本格的に発掘調査を開始する。富県8089番地において、現道の西側拡幅部分にトレンチを設定(1.5m幅)し、北側から重機にて表土剥ぎを開始する。掘り始めると同時にトレンチの北端から住居址と思われる落ち込みが見られた。落ち込み部分の深さ約30cmのところ堅く叩かれた床面を確認した。また、表土剥ぎを進めたところ、トレンチの中央部から南にかけて溝状遺構と思われる落ち込みを確認した。続いて、富県8092番地においてグリッドを2か所設定し、遺構検出を行うが、遺構・遺物とも発見されなかった。このグリッドについて、セクション図を作成、写真を撮影し、終了後道路脇で危険なため、埋め戻しを行う。夜間の安全対策を行い、作業を終了する。

平成21年7月3日 前日確認した落ち込みを、重機にて掘削箇所を拡張する。トレンチ北端の住居址と思われた落ち込みは弥生時代後期土器片を伴っており、これを第1号竪穴住居址とし、遺構掘削を進める。

平成21年7月6日 雨のため作業を中止する。

平成21年7月7日 第1号竪穴住居址の遺物分布図を作成し、遺構掘削を完了する。午後、遺構断面図を作成する。トレンチ中央付近の溝状遺構と思われた落ち込みについて、遺構検出・遺構掘削を行う。弥生時代後期の底部穿孔土器がほぼ完型で出土した。

平成21年7月8日 トレンチ中央付近の遺構は溝状の様相を呈し、土器片が多く出土した。昨日出土の土器付近から、有孔磨製石鏃が出土した。

平成21年7月9日 溝状遺構について、トレンチに平行した大型のものを第4号溝状遺構、それと垂直に交わる北側のものを第5号溝状遺構、南側のものを第6号溝状遺構とする。第4号溝状遺構はV字状を呈し、大型である。大量の土器片が出土している。第4号・第5号溝状遺構の遺物分布図を作成する。

平成21年7月10日 雨のため、作業を中止する。

平成21年7月13日 第4号・第5号溝状遺構の遺構掘削を進める。第4号溝状遺構から有孔磨製石鏝と、ほぼ同じ位置からやや大きい磨製石鏝が出土した。

平成21年7月14日 第4号～第6号溝状遺構の遺構掘削を進める。第4号溝状遺構から、3個目の磨製石鏝が出土した。第6号溝状遺構の遺物分布図を作成し、遺構掘削を終了する。

平成21年7月15日 全ての遺構の清掃を行い、写真を撮影する。第4号～第6号溝状遺構の遺構断面図を作成する。

平成21年7月16日 全ての遺構の平面図を作成する。遺構の精査をおこない、第4号溝状遺構の西に見られた遺構を第1号石囲遺構とした。浅い円形の穴の中に石を2列に縁に沿って配置しており、中心に炭と焼土がみられた。また、若干の骨片が見られたが、大きさから小動物のものと思われる。遺構配置図を作成する。

平成21年7月17日及び21日 雨のため、作業を中止する。

平成21年7月22日 埋め戻し作業を実施する。道路の清掃を行い、発掘資・機材を洗浄し、伊那市考古資料館へ運搬する。本日で現場での作業を終了とする。

平成21年9月～平成21年12月 遺物の整理、遺物の実測、図版・図面の作成、写真撮影を行う。

平成22年1月～平成22年3月 報告書の校正および刊行。



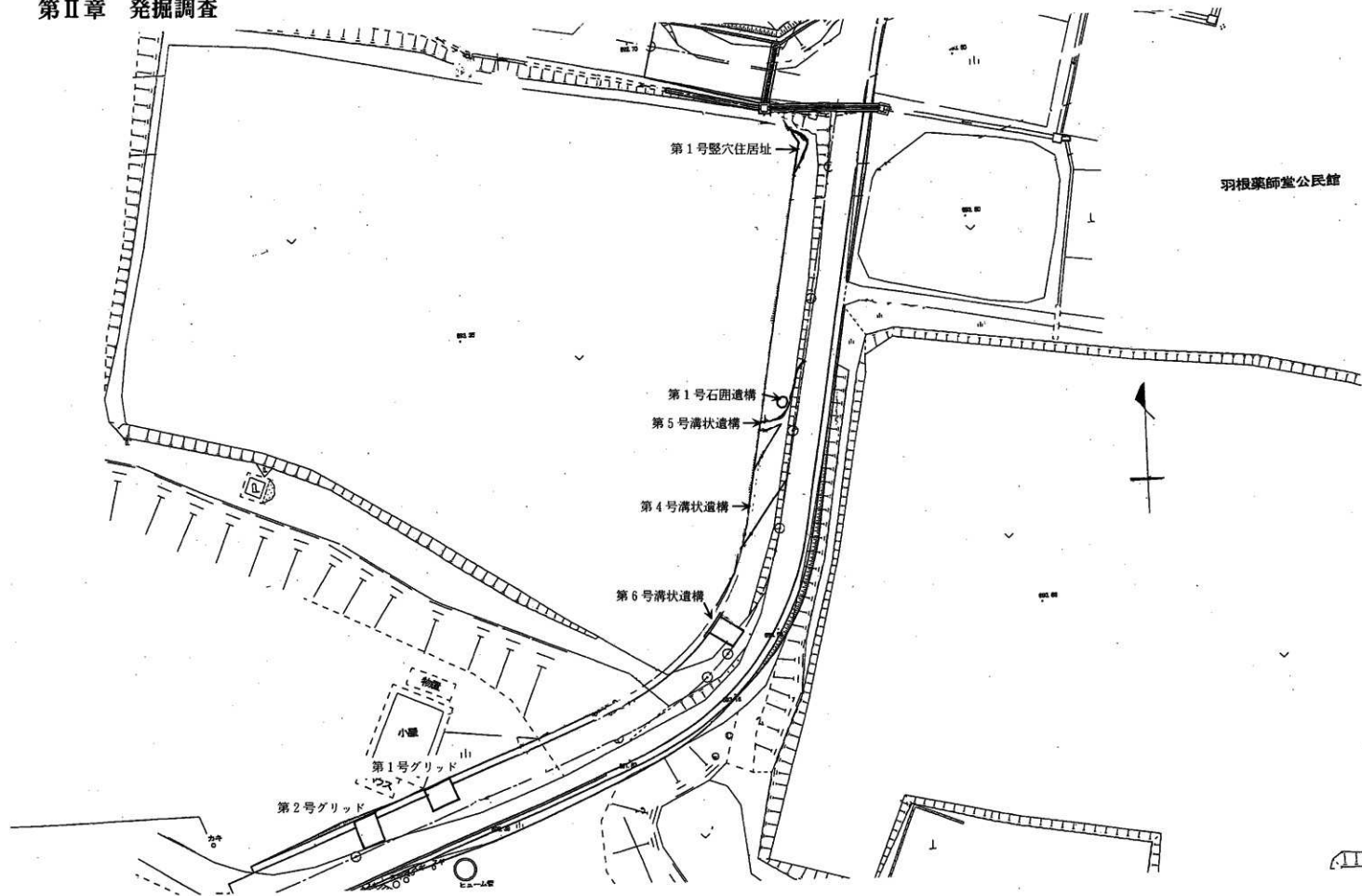
発掘風景



発掘風景

(高松慎一)

第II章 発掘調査



第1図 地形及びトレンチ・遺構配置図 (1:250)

第1節 調査の概要

今回、発掘調査を行った「羽根原遺跡」は平成20年に実施した発掘調査の場所から、道を隔てた南側に位置している。この調査地域は大部分が水田になっており、ところどころで減反政策による麦畑の個所も見られた。これに順応するかのようにして発掘調査地区も麦畑に利用され、これを夏場に収穫して発掘調査に取り掛った。

各遺構より出土した遺物は後、12頁の遺物の節で述べる。第1次、第2次の双方を一緒に掲載してあるので、遺構と見較べて下さい。最後に、大きな面積の発掘調査を実施すれば、かなりの成果が上がったものと推測できる。

第2節 遺 構

今回の発掘調査を実施した個所が道路の拡張と言うように幅が狭く、よって検出された遺構の全貌は不明であり、かつ、出土した遺構も数少なく、それは第1号竪穴住居址、第4号溝状遺構、第5号溝状遺構、第6号溝状遺構、第1号石囲遺構だけであった。これらを前述した順に1つ、1つ丁寧に様相を記述する。

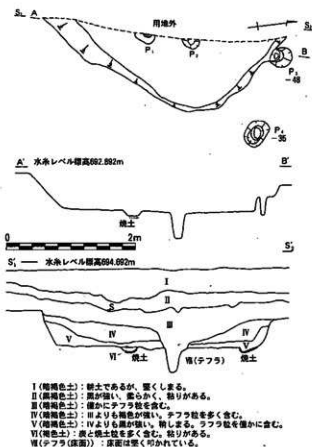
第1号竪穴住居址（第2図 図版1）

今回、調査した内で最北端に位置し、表土面より1m位下層のソフトテフラ層を掘り込んだ竪穴住居址ではあるが、大部分が用地外であるために、その全貌は不明であった。

全貌のプランは前述したようにほんの一部分の姿だけしか把握できなかったが全掘すれば平面プランは小型ではあるが隅丸方形を呈し、その規模は南北で3m90cm程度を測定できるが、東西は用地外のために不明である。したがって現状は半分位しか検出できなかった。

壁高は40cm～60cm位とやや深目でありそれぞれの状態は次のようであった。

東壁は軟弱、南壁は凹凸が多く、軟弱、北壁は垂直に近似し軟弱であった。炉は住居址の中央部付近にあり、当初は若干



第2図 第1号竪穴住居址実測図・断面図

の焼土があり、それに混じて正位状態にて埋燵炉が見えられ、一時的に利用されたと思われる。少量の土器片が残存していた。

第2図内でP1が埋燵炉の残骸と推測され、P3、P4は形状と深さ、断面の状態からして主柱穴と思われる。

床面は大般平坦で極めて堅い。

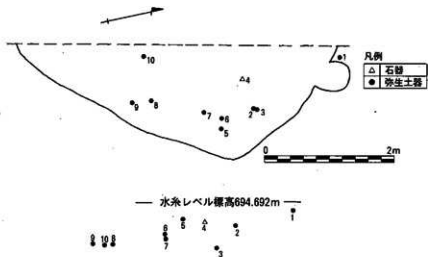
出土したのは弥生時代後期土器片が主体となり、他の時期の遺物は何も出土しなかった。特殊な遺物として小さな球体の形をした、いわば石球と呼ばれる石器が出土した。竅穴住居址の埋没土層を上層から下層へ向かって順々に述べると下記のようになる。Iは暗褐色土層（耕土であるが堅くしまる。）、IIは黒褐色土層（黒が強く軟らかく粘りがある。）、IIIは暗褐色土層（僅かにテフラ粒を含む。）、IVは暗褐色土層（IIIよりも褐色が強い。テフラ粒を多く含む。）、Vは暗褐色土層（IVよりも黒が強い。稍しまる。テフラ粒を僅かに含む。）、VIは褐色土層（炭と焼土粒を多く含む、粘りがある。）、VIIはテフラ（床面が強く叩かれている。）である。

第1号竅穴住居址は前述したように弥生時代後期の竅穴住居址であり、用地買収の都合で約半分位の発掘調査であった。したがって、出土遺物も少なく第3図に表示したように10片に留まり、その内訳は弥生時代後期土器9片、同時期の石器1個のみである。全面発掘を実施したならば当然ではあるが、もう少し多くの土器が出土したのであろう。

第4号溝状遺構（第4～5図 図版1）

本遺構は今回の発掘調査を実施した内でほぼ中央部付近に検出された。遺構の掘り込み面までは約1mあり、断面はガラガラしており、その状態がハードテフラ層まで連続していた。それはソフトテフラ層であり見事にだいたい色を呈していた。プランは明瞭ではないが、現存している状態から見て溝状であり、90cm内外と深かった。

床面はハードテフラ層中に構築され、その様相は強く凹凸が激しかった。この溝内より弥生時代後期の土器片が100片を越す程に出土しているが、その内で主だったものを第5図に掲載した。特に目立った遺物として有孔磨製石鏃が3点、打製の石鏃2点、底部穿孔土器（塗彩土器らしき痕跡が見られた）等々が出土しており、この状態からみてあるいは「方形周溝墓」の一部かも知れない。



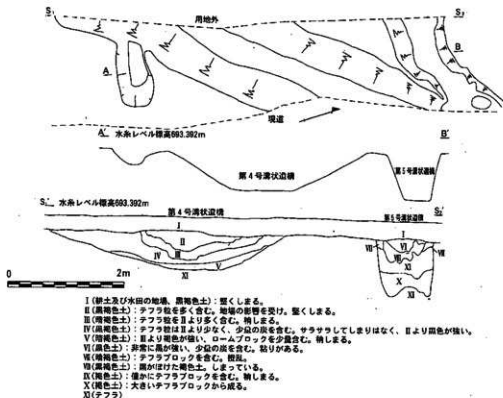
第3図 第1号竅穴住居址遺物分布図

第5号溝状遺構（第4～5図 図版1）

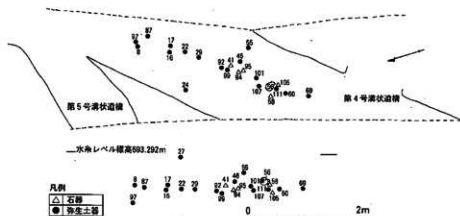
本遺構は第4号溝状遺構と第1号石囲遺構とに挟まれた状況下に位置し南側で第4号溝状遺構に接し、表土面より40cm位下がったソフトテフラ層を掘り込んでいる。南北はテフラ層を掘り込み、東西は用地外のために規模は不明である。構築状態は第4号溝状遺構と酷似している。床面はハードテフラ層に築かれ極めて強く、凹凸が顕著である。数片の弥生時代後期土器が出土したが、細片であり、第5図では省略した。

第6号溝状遺溝（第6図 図版2）

本遺構は今回検出された中で、最も南側に発見されたものである。表土面より45cm位下がっ



第4図 第4・5号溝状遺構・断面図



第5図 第4・5号溝状遺構遺物分布図

たソフトテフラ層を掘り込む、東西は用地外のため規模は不明。南北は現状が見えるだけで2 m程度である。プランは溝状であり、柱穴の存在はどこにも見られなかった。

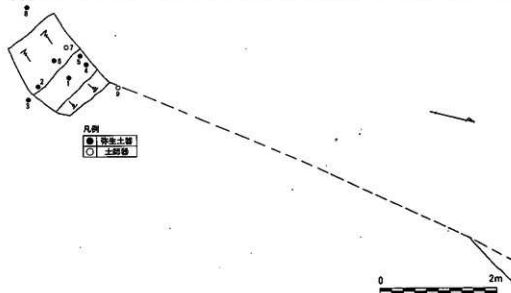
壁高は東と西は用地外のために把握はできなかったが、南壁と北壁は20~30cm位が測定できたと同時に二つの壁は急傾斜を成していた。床面は堅く、凹凸があった。

土層の埋没状況は上層から下層に向かって次のようになる。I層は黒褐色土層（テフラ粒を多く含む。水田の地場であり、堅くしまる。）、II層は黒褐色土層（I層と同様であるがしまっておらず、軟弱である。）、III層は黒褐色土層（II層と比較して稍テフラ粒の量が多い。）、IV層は暗褐色土層（テフラ粒、テフラブロックを多く含む。）、Vは褐色土層（テフラブロックから成る。）、VIはテフラ層である。

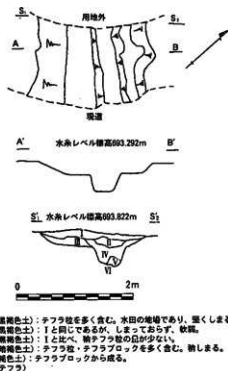
遺物の出土量は極めて少なく、第7図に掲載した程度であり、弥生時代後期土器片が主体を留めていた。したがって、本遺構もこれと同時期と推定してよからう。

第1号石囲遺構（第8図 図版2）

本遺構は隣接した個所に第4号溝状遺構が走っている。表土面より90cm程下がったソフトテフラ層面を掘り込んで構築してあり、その規模は南北70cm位、東西70cm位とほぼ東西南北が同一値であるが平面プランはところどころで角張った形態をとっている。意味は全く分からず困惑した。



第7図 第6号溝状遺構遺物分布図



I (黒褐色土) : テフラ粒を多く含む。水田の地場であり、堅くしまる。
 II (黒褐色土) : Iと同じであるが、しまっておらず、軟弱。
 III (黒褐色土) : Iと同様、稍テフラ粒の量が少ない。
 IV (暗褐色土) : テフラ粒、テフラブロックを多く含む。締しまる。
 V (褐色土) : テフラブロックから成る。
 VI (テフラ)

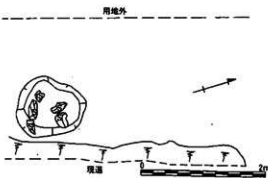
第6図 第6号溝状遺構実測図・断面図

底面に近い位置、あるいは底面に接して、5個の石（三峰川産緑色岩）を長方形に配列しており、何かの遺構と考えられる。床面とその周辺は極めて強く、その石は人頭大から拳大（高さは数cm）程度である。

遺物は少量の木炭と焼土が検出された。5つの石は方形に囲んで組んであり、中央部に向かってわずかに傾斜している。薄く堆積した黒色土層に混じって何であるかは不明であるが、少量の骨片らしきものが出土した。おそらく獣骨の一種かと思われる。

単独の遺構と判断できる要素が具現されたので、あえて「石囲遺構」と命名した。

（飯塚政美）



第8図 第1号石囲遺構実測図

第3節 遺物（第9～10図 第1～2表 図版3～4）

発掘調査は平成20年度の第1次調査から、第1号溝状遺構～第3号溝状遺構の調査を、21年度の第2次調査では第1号竪穴住居址の一部と第4号溝状遺構～第6号溝状遺構を検出し、弥生時代と少量の弥生時代以降の遺物を採出した。遺物はすべて遺構内から検出した。

遺物はすべて遺構内から検出する。その内訳は弥生土器96と縄文土器1、古代土器3点を採集した。

表示できる遺物は、石器-有孔磨製石鏃3、打製石鏃2、石鏃未完成品1、石球1-を第9図に、土器復現図3と土器破片拓影を第10図にまとめて表示した。以下遺構別に記載する。

・第1号竪穴住居址

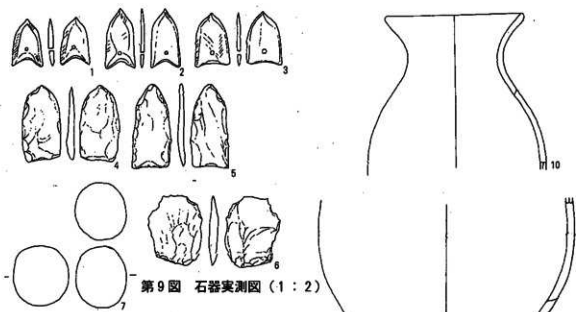
第1号竪穴住居址からは弥生土器破片3と石球1を検出した。拓影1は鉢形土器口縁部である。胎土緻密で器壁両面に塗彩されている。伊那地域で焼成できない土器。搬入品である。石球7は花崗岩を使用する。

・第1号溝状遺構

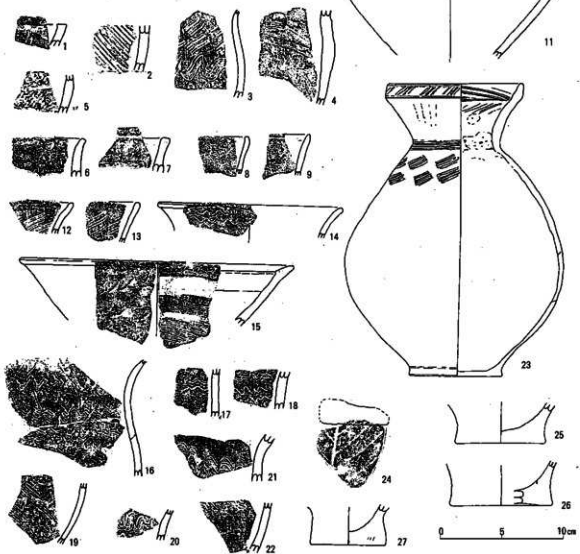
総数7点出土がある。拓影2と土器底部7の実測図を示した。2は貝殻条痕文、弥生時代中期初頭期である。

・第2号溝状遺構

本溝状遺構から32点が出土する。第10図10・11の復現図・拓影3・4を示した。



第9圖 石器实测图 (1 : 2)



第10圖 土器拓影・土器实测图 (1 : 3)

10はラッパ状に開いた口縁から胴最大径まで、口唇部に浅いキザミの加飾痕がわずか。それ以外は文様がない壺形土器。11は胴部以下の甕形土器。拓影3は甕の口頸部から胴部、幅9mm、5の沈線深い斜短線2帯と波状1帯を施文する焼成良い土器。

弥生時代後期前半期に使用された土器である。

拓影4は土師器で時期は不明である。

・第3号溝状遺構

本溝状遺構はその溝内から15点が出土するも示される資料はない。

・第4号溝状遺構

本溝状遺構から第6号溝状遺構の発掘調査は、平成21年の第Ⅱ次調査で検出する。

本遺構内からは42点が出土し、図版4と測図23・24・26と拓影5～9・12～22を示す。

6～9は無文小型甕形土器の口縁部である。縄文晩期最末期の特徴をもつ弥生時代中期初頭期の甕形土器。12・13は櫛施文の斜短線文。14・16・18～22は櫛施文の波文は多様な施文技法を見る。22は同心円文。19は細斜線で整形された土器。23は胎土大粒の長石混で内壁が剥落し薄くなる。文様は受け口縁に1帯、胴上部に2帯のあらく深い斜短線と、くびれる頸部に平行沈線帯を施文する。口縁径11cm、胴下部最大幅17.4cm、器高23.3cm、底部7.4cmである。

底部が図化できる3点以外にも底部2点が出土する。特に図24底部は弥生時代に少ない木葉底がある。

15は、口縁部からの復現図。高坏であろう。暗褐色、胎土は良質である。伊那地方での高坏の出土例は少なく、決められない資料である。

図版4の第4号溝状遺構出土の塗彩土器は高坏。胴部分胎土良質、粘土固く締り外タテ、内ヨコにミガカレ、塗彩も丁寧の作り。伊那地域では焼成されない搬入品。

第4号溝状遺構の出土土器の多くは弥生時代後期中葉期であろうが、伊那地域の弥生時代の遺物出土例は少なく、時期決定はこれからの研究が待たれる。

・第5号溝状遺構

本溝状遺構内では、細片1出土。それは須恵器か。

石器類

第4号溝状遺構内から有孔磨製石鏃3点、打製石鏃2点が出土。

・第1号墓坑

この遺構から馬の骨の一部が出土し、遺構内から土器破片5点が出土するが細片で時期を決められない。

(太田 保)

第1表 石器観察表

図番号	遺物番号	名称	大きさ(mm)	重量(g)	材質
1	4溝-105	磨製石鏃	38×25×4	4	緑色岩
2	4溝-94	磨製石鏃	47×24×3	4	緑色岩
3	4溝-58	磨製石鏃	42×29×3	4	粘板岩
4	4溝-41	打製石鏃	60×31×5	14	緑色岩
5	4溝-95	打製石鏃	63×31×5	14	緑色岩
6	4溝-10	未完成製品	52×43×6	18	緑色岩
7	1住-4	投石	48×44×41	122	花崗岩

凡例	
1溝	第1号溝状遺構
2溝	第2号溝状遺構
4溝	第4号溝状遺構
1住	第1号竪穴住居址

第2表 主要遺物観察表

図番号	遺物番号	器種	部分	文様	胎土	焼成	備考
1	1住	鉢	口縁部	—	白砂小粒	締り固い焼	外面は指状工具で整ミガキ。口唇を平らに磨く。朱塗りの。(写真)
2	1溝-3	甕	胴部	貝殻条痕	白砂小粒	締り固い焼	横ナデ。縄文晩期の特徴
3	2溝-4-9	甕	口頸部	輪による短斜線2帯 波状文1帯	雲母粉少量、 白砂粒少量	締り固い焼	内外ミガキ。
4	2溝-10	甕	口頸部	—	細かい粘土	締まる焼	外面は指状工具で整ミガキ。内面は横ナデ平行線。
5	4溝-87	鉢	—	縄文	砂小粒	締まる焼	
6	4溝-101	鉢	口縁部	横ナデ	砂小粒	軟位	口縁部まで施覆付着。内面は横ナデ。弥生初期期か。
7	4溝-8	鉢	口縁部	横ナデ	砂小粒	軟位	口唇を平らに磨く。頸部は横ナデ。内面は横ナデ。弥生初期期か。
8	4溝-46	鉢	口縁部	不明	砂、雲母	軟位	斜ナデ。横ミガキ。弥生初期期か。
9	4溝-55	鉢	口縁部	細い堅線	砂小粒	締り固い焼	口縁外には沈線が1条平行に刻まれている。斜ナデ。弥生初期期か。
10	2溝-4	壺	口縁部	—	粘土細い	締り固い焼	内面は割落が多い。外面はミガキ。口縁・内口縁共に横ナデ。
11	4溝-8	甕	胴部	—	砂粒混じる	軟位	内外壁は荒れており、整形不明。
12	4溝-99	甕	口縁部	輪による斜短線	砂粒目立つ	中位	内外横ナデ。口縁で立上がる。小型土器。
13	4溝-92	甕	口縁部	輪による斜短線	胎土細かい	中位	内外横ナデ。小型土器。
14	4溝-29	甕	口縁部	輪による波状文1、 輪による斜短線1	砂、雲母細かい	中位	内面横ナデ。丸い口唇部上面。胴状工具による刻み痕あり。外面横ナデ。内面に平行線が残る。指状工具で横ナデ。(写真)
15	4溝-69	高坏か	口縁部	—	緻密な胎土	締り固い焼	外面横ナデ。内面は横に細い平行線が残る。工具で横ナデ。
16	4溝-22	甕	胴上部	輪による波状文3	小粒の砂混じる	締り固い焼	内面ミガキ。波は小波で細く浅い施文。
17	4溝-16	甕	胴上部	輪による波状文1	砂粒混じる	締まる焼	内面横ミガキ。輪による波は細く浅い施文。
18	4溝-24	甕	胴上部	輪による波状文2	砂粒混じる	軟位	内面横ミガキ。輪による波は細く浅い施文。
19	4溝-97	甕	胴部	輪による斜線	砂粒混じる	締り固い焼	内外ミガキ。細い斜線に施覆付着。
20	4溝-110	甕	胴上部	輪による波状文2	砂粒混じる	締り固い焼	内外ミガキ。変形波状文。
21	4溝-162	甕	胴上部	輪による波状文1	胎土細かい	締り固い焼	内外ミガキ。大波施文。
22	4溝-60	甕	胴部	輪による同心円	砂少量混じる、 雲母	締り固い焼	内外ミガキ。赤色焼。
23	4溝-56	壺	全体	口縁：輪による斜短線1 胴部：輪による平行線1 胴上部：輪による斜短線2	砂少量混じる、 雲母	締まる焼	内外ミガキ。磨蝕残る。外面小波及び内口縁を横ミ削る。器の厚さが薄くなっている。口径110mm。胴下部最大174mm。高さ233mm。
24	4溝-17	—	底部	木葉痕	大粒の長石混じる	軟位	残存率40%。
25	1溝-7	—	底部	—	砂粒混じる	締まる焼	径73mm。全形。
26	4溝-111	—	底部	—	小粒の砂少量混じる	締まる焼	径82mm。残存率20%。
27	4溝-107	—	胴部	—	小粒の砂少量混じる	締り固い焼	外面は整ミガキ。内面は横ミガキ。朱塗り。(写真)

(作成 太田 保)

第三章 所 見

昨年に引き続いて、市道拡張で、急拠「羽根原遺跡」の発掘調査が脚光を浴び出した。この時の発掘は第Ⅱ次で、その前年に第Ⅰ次の調査をい、そのような経緯を経て合本にして一冊の報告書にまとめあげてある。

1. 第1号竪穴住居址

用地内を掘っていくと半分位の状態が分かった。若干、円形状に近いプランを描き、数片の弥生時代後期土器片を出土した。

2. 第4号溝状遺構

第5号溝状遺構と接しており、溝中より弥生時代後期土器片が集中して100片を越す程度出土。さらに有孔磨製石鏃3点が出土。特例として底部穿孔土器が横倒しになって出土し、この状況は方形周溝墓の一形態の姿かどうか判明しないが、類例が増加すれば、いずれは分かるようになるであろう。

全般的に見て第1号溝状遺構から第6号溝状遺構の溝はよく、その様相からみて、さらに、底部穿孔土器の出土からみて、全貌はわからなかったが、方形周溝墓の残骸であると思われる。方形周溝墓だとすれば伊那市内では発見三例目となる。第一例目は南小出南原遺跡（西春近南小出）、第二例目は、まこもが池遺跡（富県貝沼）である。

3. 第5号溝状遺構

南側で第4号溝状遺構と接し、溝が蛇行状に走り、数片の弥生式土器片が出土、床面は堅く、凹凸は顕著であった。

4. 第6号溝状遺構

第4号、第5号溝状遺構と酷似しており、この一帯は弥生時代後期の方形周溝墓域内に含まれていたのではないか。

5. 第1号石囲遺構

狭い範囲の調査だったので、その実態は不明であるが、発掘状況から見て、第Ⅰ次に述べた馬の墓坑に関連した何かではないだろうか。これも類例の発見を待ちたいところである。

今回の調査で多大なお手伝いと各所に御協力を頂いた地元の皆様には厚くお礼申し上げます次第であります。

(飯塚政美)

图 版



第1号竖穴住居址



第4・5号溝状遺構



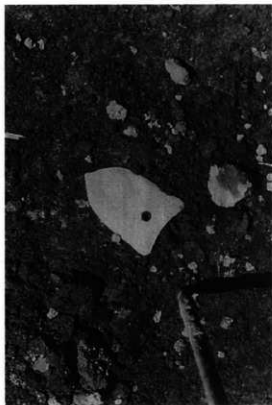
第6号溝状遺構



第1号石圍遺構



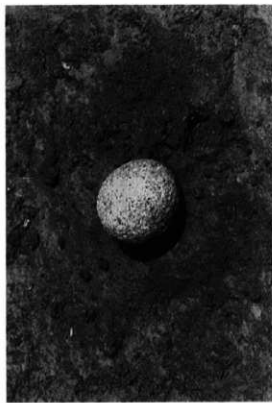
底部穿孔土器（弥生時代後期土器）



有孔磨製石鏃出土状況



有孔磨製石鏃出土状況



石球出土状況



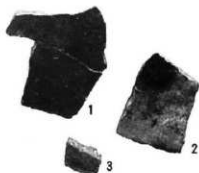
底部穿孔土器 (第4号溝状遺構)



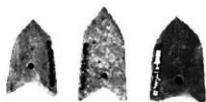
石球 (第1号竪穴住居址)



底部穿孔土器の底部



1 塗彩土器 (第4号溝状遺構)
2 高坏か (第4号溝状遺構)
3 塗彩土器 (第1号竪穴住居址)



有孔磨製石鏃 (第4号溝状遺構)



打製石鏃 (第4号溝状遺構)



打製石斧 (第4号溝状遺構)



岩石 (綠色チャート) (第4号溝状遺構)

報 告 書 抄 録

ふりがな	はねほらいせき							
書名	羽根原遺跡（第Ⅱ次発掘調査）							
副書名	一般道路改良工事（市道羽根1号線）							
巻次								
シリーズ名	伊那市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1集							
編著者名	飯塚 政美 太田 保							
編集機関	伊那市教育委員会							
所在地	〒396-8617 長野県伊那市下新田3050番地 TEL 0265-78-4111							
発行年月日	西暦 2010年3月19日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
羽根原	長野県 伊那市 富県 北福地	20209	261	35° 48' 21"	137° 59' 25"	平成21年 7月1日 ～ 平成21年 7月22日	95	市道改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
羽根原	集落跡	縄文時代 弥生時代 平安時代	弥生時代竪穴住居址 1 弥生時代溝状遺構 3 時代不詳石囲遺構 1	<ul style="list-style-type: none"> ・弥生時代土器 ・弥生時代有孔磨製石鎌 ・弥生時代打製石鎌 ・弥生時代石製品 ・平安時代の土師器 		遺構は弥生時代の方形周溝墓の可能性が高いが調査範囲が狭く、遺構の全体像の把握は困難。		

羽根原遺跡

一般道路改良工事（市道羽根1号線）。

—埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書—

平成22年3月17日 印刷

平成22年3月19日 発行

発行所 長野県伊那市下新田3050番地
伊那市建設部建設課
伊那市教育委員会

印刷所 有限会社 聖光房美術印刷所
長野県伊那市狐島4260番地11

